

食用海藻養殖試験 (要 約)

佐藤 康子

深浦町北金ヶ沢地先には、離岸堤が設置され、その陸側が静穏域となっている。静穏域の活用推進を図るため、食用海藻の養殖技術開発を試みた。

調 査 方 法

1 アオワカメ

平成15年7月4日に大間町奥戸で採取した成熟個体を母藻に用いて採苗した。平成15年10月28日に葉長5mmの種苗を長さ1.5mのノレンに20cm間隔で挟み込んで水深1.5～3.0mに沖出し、養成を開始した。平成16年1月26日、2月20日、3月16日、4月27日、5月20日に養成藻体を採取し、大型な順に20個体を選び、葉長、葉幅、葉重量（湿重量）と子嚢斑の有無を観察するとともに、ノレン1本あたりの収量を求めた。

2 ツルアラメ

平成16年10月6日に北金ヶ沢漁港付近で採取した藻体を葉状部が1枚になるよう匍匐枝を切断して分けた後、長さ1.5m、2.0m、3.0mのノレン各々20本に20cm間隔で挟み込み、水深1.5mに設置した養殖施設の幹綱に2m間隔でノレンを結着して養成を開始した。平成17年1月26日及び2月23日に各長さのノレンを1本ずつ取りあげ、生育する全ての藻体の葉長、葉幅、葉重量を測定した。

結果および考察

1 アオワカメ

平成15年10月に沖出しした種苗は、沖出し5ヵ月後の平成16年3月に葉長が平均171cmで最大となった後、末枯れした。葉幅は調査終了時の平成16年5月まで増加し、平均30cmになった。葉重量は沖出し6ヵ月後の平成16年4月に平均330gで最大になった。子嚢斑は3月には見られなかったが、4月にはすべての藻体に形成された。長さ1.5mノレン1本あたりの収量は、平成16年2月から5月の各月に各々平均219g、987g、2,612g、2,846g、1,685gとなり、4月に最大になった。

このことから、10月に沖出ししたアオワカメ種苗は、3～4月に収穫できると考えられた。今後は現地での人工採苗技術を確立し、生産した種苗を沖出しして養成特性を調査し、さらに養殖水深について検討する予定である。

2 ツルアラメ

平成17年1月には匍匐枝から新葉の発出が見られ、長さ1.5、2.0、3.0mの各ノレンにおける1株あたりの新葉数は、2月には各々平均21.6枚、5.3枚、4.1枚となった。1株あたりの重量は2月に1.5、2.0、

発表誌：平成16年度青森県水産基盤整備事業調査 多機能静穏域関連調査（養殖試験）報告書、青森県水産総合研究センター増養殖研究所、平成17年3月

3.0mノレンで各々平均52.3g、33.4g、56.6gとなり、沖出し時の1.3~2.1倍となった。また、生育水深ごとに藻体の生長を比較したところ、1株あたりの葉重量は2月に水深4~4.5mで56.1gと最も大きくなり、水深1.5~2.0mで27.9gと最も小さかった。一方、1株あたりの新葉数は2月に水深1.5~2.0mで13.7枚と最も多く、水深4~4.5mでは5.5枚であった。

今後は引き続き沖出しした藻体の生育状況を観察し、養殖方法について検討する予定である。